

平成22年5月27日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2007～2009
 課題番号：19520132
 研究課題名（和文） 泉鏡花文学の成立と受容を「対時代性」「伝統性」の観点から検証する研究
 研究課題名（英文） An examine the formation and reception of Izumi Kyoka literature from viewpoints of “contemporaneity” and “traditionality”

研究代表者

鈴木 啓子 (SUZUKI KEIKO)

宇都宮大学・教育学部・教授

研究者番号：70206478

研究成果の概要（和文）：泉鏡花作品がどのような文学状況を背景に、どのような読者を意識しつつ制作され、どのように受容されたかを、同時代評・先行研究の収集検証によって、その通史的な全体像の把握に努めるとともに、作品成立期の文化・文学状況を視野に入れながら、個々の鏡花作品の具体的な検証を行い、「対時代性」と「伝統性」の観点から、鏡花文学の文学的特色と文学史的位相の再検証を試みた。

研究成果の概要（英文）：In order to get a whole picture of Izumi Kyoka's works, I collected and examined evaluation from contemporaries and previous studies of his works to find out what kind of readers his works targeted at, under what literary circumstances his works were produced, and how they were accepted. I also specifically examined each of his works based on the cultural and literary circumstance at the time when his works were formed, and tried to re-examine the literary characteristics and the literary phase of Izumi Kyoka literature from viewpoints of “contemporaneity” and “traditionality”.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：日本文学

キーワード：近代文学・古典文学・古典芸能・演劇

1. 研究開始当初の背景

泉鏡花は、時代の潮流とは隔絶し、自らの内的テーマに向かい、独自の文学世界を紡ぎ出した作家というイメージが強い。しかし、その作品を個別に見ていくと、その

時々の社会・文化状況を鋭敏に察知し、同時代の読者を強く意識して、戦略的に創作を行っていることに気づかざるを得ない。また、鏡花が前近代的・反近代的な作家と評される要因として、古典文学や古典芸能

の素材や表現様式を積極的に摂取して創作を行っている点が挙げられるが、この古典的特質も、時代に背を向けた反時代的な特質だと一概に決めつけられないのではなからうか。以上のような問題意識から、鏡花文学を「対時代性」と「伝統性」の2観点から検証しようと考えた。

従来の鏡花研究において、「対時代性」「伝統性」という観点が看過されてきたわけではない。「反自然主義」「反近代」の作家という意味づけは鏡花生前からなされており、300編を数える作品と同時代の関係については、作品成立の背景という観点から、モデル問題、素材・典拠・舞台等に関して、精緻な実証的研究が積み重ねられてきている。鏡花文学と古典との関わりについても、能楽の影響は当初から指摘されており、この30年の実証的研究において、素材となった近世文芸や口碑伝説が発掘・検証されてきた。しかしながら、従来の鏡花研究においては、作品の素材や成立の時代背景の問題を、作品解説の一要素として扱うか、あるいは鏡花の出自・体験・資質の問題として、いわば作家論的に処理してきた傾向がある。鏡花は創作の舞台裏を明かすことを嫌った作家であり、創作意図や文芸理念を伝える資料は少ない。「天才の名人芸」として封印されてきた鏡花文学の特質を、制作(作者)と受容(読者)の両面から同時代に開いて検証し、その文学的特質と文学史的位相の解明をめざしたいと考えたのが、当初の問題意識である。

2. 研究の目的

泉鏡花文学が、どのような社会・文化・文学状況を背景に、どのような読者を想定して制作され、その結果どのように受容・評価されてきたかを、作品に即して具体的、かつ通史的に検証し、鏡花文学の「対時代性」(＝同時代の社会・文化・文壇への批評性、同時代の読者への戦略性)の解明をめざす。特に、明治30年代半ば以降の作品については、「伝統性」(＝日本伝統文化の継承と再生)に注目する。鏡花文学において、「対時代性」と「伝統性」は不可分の関係にあるという見通しのもと、鏡花文学の「成立」と「受容」の諸相を、①同時代の文学批評の状況、②同時代作家の創作活動の状況、③同時代の古典文学の研究・出版状況、④同時代における能狂言・歌舞伎・落語・邦楽等の古典芸能の状況、⑤鏡花文学研究史、⑥近現代における映画化・舞台化の状況、を広く視野に入れて調査し、鏡花文学の位相と特質を再検証する。

3. 研究の方法

(1) 泉鏡花作品の文芸時評の収集整理検証

を行う。昭和女子大学編『近代文学研究叢書』「資料年表」を基礎資料に網羅的な収集を行い、以下の10期に分けて整理分析する。

- 第1期＝明治20年代(日清戦争前後)
- 第2期＝明治30年代前半(『高野聖』前後)
- 第3期＝明治30年代後半(日露戦争前後)
- 第4期＝明治40年代(自然主義文学と反自然主義文学の台頭期)
- 第5期＝大正期(戯曲の名作を生んだ時期)
- 第6期＝大正末から昭和14年(関東大震災から逝去までの晩年期)
- 第7期＝昭和10年代～20年代半ば(鏡花研究の黎明期)
- 第8期＝昭和20年代半ば～40年代半ば(戦後の文学的評価が低迷した時期)
- 第9期＝昭和40年代半ば～60年代半ば(再評価が行われ、本格的な研究が開始された時期)
- 第10期＝平成元年以降の約20年(研究が深化し、舞台芸術における鏡花受容が活性化した時期)

(2) 鏡花作品の先行研究を収集整理し、「対時代性」「伝統性」という観点で読み直し、分析・検証する。田中励儀編「泉鏡花参考文献目録」を基礎資料とする。

(3) 古典文学や伝統芸能を素材とする鏡花作品の先行研究を収集整理し、先行研究に学びつつ作品研究を行う。作品研究に関しては、泉鏡花研究会を勉強の場として最大限に活用する。

(4) 近代作家の古典文学・伝統芸能を素材とする小説作品をとりあげ、その検証を通して、鏡花文学の特質と位相の把握に役立てる。これについては本務校の授業や卒論修論指導を活かして行う。

(5) 明治・大正・昭和戦前の伝統芸能(能楽・歌舞伎・伝統芸能・歌謡等)に関わる記事を、新聞、「文芸倶楽部」「太陽」等の総合雑誌、「帝国文学」「三田文学」「早稲田文学」「新思潮」「白樺」「校友会雑誌」等の文芸雑誌、「能楽」「歌舞伎」等の古典芸能関係の雑誌で検索収集する。

(6) 鏡花を原作とする舞台芸術の動向を視野に入れて、「受容」と「伝統性」の検証に役立てる。

4. 研究成果

(1) 昭和女子大学篇『近代文学研究叢書』「資料年表」等を参照しつつ、同時代評の収集とPDF保存を行った。研究期間中に、『文芸時評大系』明治篇～昭和篇（ゆまに書房）が刊行され、第1期～第7期にかけて『近代文学研究叢書』に漏れていた文献の収集が行えた。また鏡花作品に関する文献だけでなく、同時代の時評を広く視野に入れて検証することが可能になった。同時代評の検証は、その批評が生まれてくる文壇状況や、評されている作品の検証を意味する。統合的・通史的な検証は端緒についたばかりであるが、第1期～第2期（研究方法に記載）については検証の結果を一部論文文化しえた。

(2) 論文⑤「泉鏡花文学の成立と文芸時評―「湯島詣」「高野聖」への軌跡―」は、第1期～第2期の検証をもとに執筆したものである。鏡花が田岡嶺雲をはじめとする同時代の新進批評家に見いだされ、新旧批評家の帝大赤門派と早稲田派の対する文壇批評の毀誉褒貶に晒されながら、自らの創作スタイルを確立していくプロセスを検証した。

なお、図書②『別冊太陽・泉鏡花美と幻影の魔術師』掲載の評伝「紅葉入門」「試練と開化」にも、同時代評の検証によって得た成果が反映している。また、論文②「伝説の一人称―泉鏡花「唄立山心中一曲」の表現機構―」（2008）は、第5期の大正期の同時代評の検証を活用している。

(3) 研究方法(2) 鏡花作品の先行研究を収集整理し、「対時代性」「伝統性」という観点で読み直し、分析・検証するという取り組みについては、研究期間前から継続して行っている。従来の実証的な鏡花研究の成果を最大限に活かして統合的な再検証を行うのが本研究の基本スタンスである。なお、当該研究期間中に、『国文学解釈と観賞』（ぎょうせい）において鏡花没後70年の特集企画が生まれ、この企画立案編集に中心的に携われたことは、申請時には想定していなかった僥倖である。「泉鏡花文学の位相」「同時代からの照射」という特集テーマのもと、「成立」と「受容」の両面から鏡花文学の「文学的特質」と「文学史的位相」を問い直す特集企画を立案し、総論3篇、各論17篇を掲載しえた。

同誌掲載の論文④は鏡花研究の中心的役割を果たしてきた吉田昌志氏との対談であり、この20年の鏡花研究を顧みつつ、研究の今後の課題について指針を提示できた。本研究課題は、研究代表者が、個人

的に最も重要と考える（考え続けてきた）テーマを詰め込んで企画申請したものであるが、3年間の個人研究で達成可能なテーマではなく、長期的に、かつ共同でとり組むべき課題であることは申請前から認識している。その意味で自らの問題意識を、雑誌特集企画を通して、共同の場に開き、多くの研究者の賛同尽力を得て、共同研究の機運を高め得たことは、研究期間中の最大の成果だと自負する。

(4) 論文⑥の「悲惨小説期の貧困表象―嶺雲・眉山・一葉・鏡花の諸相―」は、日本近代文学会の平成21年度大会テーマの要請に基づいて構想執筆したものであるが、方法(2)の取り組みをベースに、日清戦争前後の社会状況に対して、鏡花がどのようなスタンスをとり、それがどのような文学の方向性を持つかを、嶺雲の批評や眉山や一葉の創作との比較を通して浮上させたものである。貧困の恥辱、弱者たる恥辱を引き受け、これをパフォーマティブに反転させていく、鏡花文学の基本構造を同時代の文学状況を踏まえて論じた。

(5) 研究方法(3)の古典文学や伝統芸能を素材とする鏡花作品の先行研究を収集整理し、先行研究に学びつつ作品研究を行う点については、対象となる作品があまりに多く、資料の整理分析を終え、総合的知見を得るには至っていない。ただし、論文②「伝説の一人称―泉鏡花「唄立山心中一曲」の表現機構―」（2008）は、「一人称」という表現文体に焦点を当てつつ、古代和歌・謡曲・神話伝説を鏤めながら近代の伝説空間を創出する鏡花の虚構の方法を具体的に論じた各論となっている。

また、泉鏡花研究会では梶由美氏による『星の歌舞伎』、三品理絵氏による『五大力』、梅山聡氏による『通夜物語』と、鏡花の歌舞伎を題材とする優れた発表が相継いだ。鏡花の古典的傾向は、30年代前半から既に始まっていることに気づかされた。こうした作品研究に学びつつ、鏡花と古典との関わりを総括的に検証していきたい。

(6) 方法(4)の近代作家の古典文学・伝統芸能を素材とする小説作品をとりあげ、その検証を通して、鏡花文学の特質と位相の把握に役立つ点については、先行研究の収集と平行して、先行研究に学びながら、樋口一葉・川上眉山・尾崎紅葉・夏目漱石・森鷗外・芥川龍之介・谷崎潤一郎・川端康成・志賀直哉・江戸川乱歩・坂口安吾・太宰治・宮沢賢治・三島由紀夫・中上健次らの短編小説を採りあげ、作品分析を行い、

鏡花文学の特色について考察した。生死の境界を越えた永遠の他者とどのように繋がるか、死者への追悼の思いをどのように共同体に伝えていくか、その時、神話伝説等の古典的素材がどのように使われるか、という問題意識に辿り着いた。総論をまとめるには至っていないが、論文②「伝説の一人称―泉鏡花「唄立山心中一曲」の表現機構―」（2008）は、芥川・鴎外らの同時代の小説状況を視野に入れ、鏡花文学の鎮魂の思想とその表現のスタイルを論じたものであり、多くの鏡花作品に敷衍できると考えている。

(7) 研究方法(5)の明治・大正・昭和戦前の伝統芸能に関わる記事を検索収集する件に関しては、DVD版の文芸雑誌の購入し、文献の閲覧に努めたが、当初予定していた院生の研究協力が思うように得られず、場当たり的な収集に留まっている。これを継続発展すべく、「伝統性」に力点をおき、鏡花文学の「日本の特質」を検証する研究として平成21年の科学費申請を行ったが、残念ながら不採用となった。(1)～(4)の方法と関連づけながら、本研究の基礎調査をベースに地道に継続していきたい。

(8) 方法(6)の鏡花を原作とする舞台芸術の動向を視野にいれて、「受容」と「伝統性」の検証に役立てる点については、研究期間中に、坂東玉三郎や松坂慶子による「天守物語」の朗読、歌舞伎座における「高野聖」「海神別荘」「天守物語」「山吹」の上演、新派「婦系図」の再演はじめ、鏡花作品の上演が相継ぎ、多くの示唆を得ることができた。鏡花作品に引用された能狂言「海人」「松風」「月見座頭」「姨捨」等の舞台鑑賞も行った。空間的に演出された場で所作や台詞に触れることにより、作中で放つ意味への理解が深まり、作品研究の着想に繋がった。

ことに、宮城聡演出・SPACによる『夜叉ヶ池』の舞台化（2008・2009）を観劇し、演出者との交流を持てたことは大きな成果である。論文③「伝説生成の時空―鏡花作品からみる鏡花戯曲―」はSPACの機関誌『劇場文化』に執筆したものであるが、鏡花の代表的戯曲「夜叉ヶ池」「天守物語」を採りあげ、「高野聖」「草迷宮」「眉かくしの霊」等の代表作と関連づけながら、鏡花文学の虚構の構造と方法を考察したものである。宮城の舞台や演出談は、鏡花と時代（共同体）との関わり方を考える上できわめて示唆的であった。

劇団『座』の詠み芝居「歌行燈」の上演においても、パンフレットの制作協力を通して上演者と交流を持つことができた。今

後も鏡花作品の優れた舞台芸術と交流しつつ、鏡花作品の現代日本における意義を「対時代性」「伝統性」の問題として考察していきたい。

5. 主な発表論文等（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

- ①猪狩友一・鈴木啓子・日比嘉高・佐藤秀明・安藤宏、〈座談会〉一人称という方法、『文学』第9巻5号、2008、査読無、pp2～31
- ②鈴木啓子、伝説の一人称―泉鏡花「唄立山心中一曲」の表現機構―、『文学』第9巻5号、2008、査読無、pp2～31
- ③鈴木啓子、伝説生成の時空―鏡花作品からみる鏡花戯曲―、『劇場文化』12号、2008、査読無、pp137～147
- ④吉田昌志・鈴木啓子、〈対談〉泉鏡花研究の現在、『国文学・解釈と鑑賞―特集泉鏡花の位相―没後70年』74巻9号、2009、査読無、pp5～25
- ⑤鈴木啓子、泉鏡花文学の成立と文芸時評―「湯島詣」「高野聖」への軌跡―、『国文学・解釈と鑑賞―特集泉鏡花の位相―没後70年』74巻9号、2009、査読無、pp60～74
- ⑥鈴木啓子、悲惨小説期の貧困表象―嶺雲・眉山・一葉・鏡花の射程―『日本近代文学』第81号、2009、査読有、pp224～238

〔学会発表〕（計1件）

- ①鈴木啓子、貧困の裏返し方―一葉・眉山・鏡花を中心に―（特集・「貧困」の「文学」、「文学」の「貧困」）、日本近代文学会春季大会、2009年5月24日、青山学院大学

〔図書〕（計2件）

- ①『国文学・解釈と鑑賞―特集泉鏡花の位相―没後70年』ぎょうせい、2009、全219頁（特集部分は196頁）、企画立案編集協力を担当
- ②『別冊太陽―泉鏡花・美と幻影の魔術師』、平凡社、2010、全159頁、評伝の全5章のうち2・3章を分担執筆

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木啓子 (SUZUKI KEIKO)

宇都宮大学・教育学部・教授

研究者番号：70206478